

分裂病の消滅？

内海健は、そのタイトルも挑発的な著書『分裂病の消滅——精神病理学を超えて』(青土社、二〇〇三)の冒頭において、いきなり衝撃的な予測を述べる。すなわち、すでに近代からも遅れて出現した「分裂病」は、「統合失調症」への改名をひとつの兆候としつつ、近代の終焉とともに消滅するのである、と。

かつては精神病理学の若き俊英と囑望され、いまなお臨床精神病理学の最良のエッセンスを次世代へと継承しつつある内海氏にして、この告白である。それがいかほど衝撃的であつたことか。しかし、この「業界」に不案内な向きには、

これはいささか奇妙で大仰な感慨にみえるかもしれない。ともあれ、内海は「予言」する。

私は密かに、分裂病というものは、将来なくなるだろうと予測している。それもそんなに先のことではないように思う。すでに述べたように、「統合失調症」への呼称変更は、単なる名前の付け替えではなく、兆候として読まれるべきである。それは分裂病と呼ばれた病理が消えることを予兆している。あの反精神医学の嵐が吹き荒れた時代、分裂病が「心の旅路」とされていたときでさえ、名称を破棄するという考えは思いつかれなかった。実際、分裂病は軽症化しているだけでなく、すでに減少しはじめているのではないだろうか。疫学的にもそのよ

うなデータが散見されるし、現場の実感としても感ずるところである。精神病院では高齢化が進み、若い事例は早々に退院していく。

この発言が衝撃的であつたのは、精神の癌とすら呼ばれたこの疾患が、天然痘と同じように根絶可能であると「宣告されたためばかりではない。ペストやコレラはすでに「絶滅危惧種」疾患であるとはいえ、人が手を加えずして自然に消滅した疾患は、いまだ存在しない。まして精神疾患ならばなおさらである。

にもかかわらず、あえてこの宣言がなされたとすれば、それがほとんど精神病理学の営々たる蓄積に対する決別宣言のように響いたとしても不思議はない。

かつて分裂病は、原因不明の内因性疾患として、常にその本質を脳の座にもとめられてきた。そこにいかなる異常が生じつつあるかをめぐっては、精神病理学の営みが幾多のすぐれた仮説を生んできた。

木村敏の「あいだ」、安永浩の「ファントム空間」、中井久夫

の「微分回路」、花村誠一の「強度の波動」、ブランケンブルクの「自明性の喪失」など、その概念史には長いリストが連なるだろう。内海自身、かつて「緊張病性エレメント」という、卓抜な概念を提唱して注目を集めた経緯がある。精神病理学の精髓ともいうべき分裂病論の領域は、実証可能性が際限なく先送りされるほかはないという制約をいわば逆手にとつて成立した、多彩できらびやかな思弁の創発空間でもあつた。その意味では分裂病の闇とは、いわば精神病理学者がナルシズムを離脱せんとして自己投入を繰り返す、「輝ける闇」でもあつたのだ。

原因不明であるがゆえに、「貫して本質主義的に捉えられてきたこの疾患に対する視座を、内海は一挙にひっくり返す。あたかも急進的な反精神医学のメンバーであるかのよう」に、内海は分裂病を構成主義的に読み替えてしまう。モダンがもたらした病は、ポストモダンへの移行とともに、過去のものになるほかはない、と。

この指摘をあえて文字どおりに受け取るなら、異論はもろろん少なくないはずである。まず第一の異論は、分裂病